

池澤夏樹『南の島のテイオ』論（二）

（〈樂園幻想〉に隠されたもう一つの物語）

中野 裕子

かつて野坂昭如の『戦争童話集』に感銘をうけ、その最後の作品、『戦争童話集 沖縄篇 ウミガメと少年』（講談社、二〇〇一年六月）に携わり映像化に尽力した画家・黒田征太郎は、『戦後』について次のように言及した。

「みんな『戦後』などと簡単に言うけれど、『戦後』なんて地球上に一度も訪れてないじゃないか」と。

（野坂昭如作、黒田征太郎絵『忘れてはイケナイ物語り オキナワ』DVD版、紀伊國屋書店、二〇〇一年）
絵を担当した黒田征太郎は野坂の『戦争童話集』を絵本にする仕事に際し、沖縄戦の物語を書くよう野坂に促したところ、横から砲弾が飛んでくる沖縄地上戦の悲惨な艦砲射撃に遭遇した経験は自分にはないから、沖縄戦の話は書けないと言ったという。（『coyote』、二〇二二年夏、七七号）そうした経緯から沖縄戦についての戦争童話は『ウミガメと少年』という、戦時下においてウミガメの産卵を見守る少年の物語を語る形に落ち着いたのだろう。だが、物語の中の少年は、飢えからウミガメの卵を口にして命をもらっても、自分の命をつなぐことはできなかった。未来にたぐはずだった命を戦争によって繋げなかった現実の厳しさは何より野坂だから書けたことだろう。野坂自身も神戸

大空襲で父母を亡くし、妹を亡くした戦時体験を『火垂るの墓』（一九六七年、十月、「オール読物」）に書いている。しかしそうであっても戦争体験という個々の経験を一括りに共有することは作家の想像力をもってしても難しい。

今年の夏に池澤夏樹は久々の児童文学作品になる絵本『旅のネコと神社のクスノキ』（スイッチ・パブリッシング社、二〇二二年八月）を上梓した。第二次世界大戦で広島島の爆心地から二・七キロという場所にありながら、倒壊を免れた鉄筋コンクリートの建物、陸軍被服支廠^{（注）}がその舞台である。その建物に起こった戦争のありさまを、神社のクスノキと、山の向こうから惨事を目撃して帰った猫の視線から書いた作品である。絵を担当したのは黒田征太郎である。ダイナミックな色遣いと構図を持った黒田の絵、また、木工師・早川泰輔によつて物のように積み上げられた木工の死体の山が、戦争の憤怒の表情をさらにかき立てる。

池澤自身は過去に沖縄で十年ほど居を構えて、嘉手納基地からベトナム戦争に向けて飛び立つ爆撃機の米軍パイロットと基地に働くフィリピン人の彼女を『カデナ』^{（注）}という小説に書いた。その意識の中には絶えず、戦争に対して、日本人として何が書けるのか、といった課題が渦巻いていたと想像できる。今回の絵本の主人公も猫とクスノキで、直接、広島を経験した人間の視線から書いたものではないが、あたかも焼け残った陸軍被服支廠の建物が歴史の生き証人として生きているように、そして再び芽吹いた木々の間から死者の眼が現代の自分たちを覗き眺めている形を取って、死者とこれから生きる者との地続きの〈戦争〉を考えている。これもまた終わらない戦後の姿なのである。

池澤夏樹の原点となったミクロネシアの旅に始まって目にした〈楽園〉、そして日本人として見た〈楽園幻想〉を描いた『南の島のテイオ』を再考し、二〇一九年十二月の日本児童文学学会の例会での学会発表の成果を踏まえて、その後、

新たにわかったことを加え、池澤が伝えようとしている戦争の意味を考えてみたい。

二

『南の島のティオ』は池澤夏樹の児童文学作品である。

作品の舞台とされるミクロネシアのポナペ島（現在のポンペイ島）は、旅好きの池澤夏樹が、二十代後半から三十代の頃、足繁く通った島^{注3}で、周りを珊瑚礁で囲まれた、自然豊かなミクロネシア連邦の六〇〇余りある島の一つである。単行本の『南の島のティオ』（楡出版、一九九二年）の裏表紙の地図を見ると、地名はすべて変えてあるものの、その地形や空港の位置などはポナペ島に酷似していることが分かる。またポナペ島を含むミクロネシア連邦の歴史は、一六世紀にカロリン諸島が発見されてスペイン領となつて以降、常に植民地の歴史であつた。一九紀末にドイツ領とされたミクロネシア連邦は、その後、第一次世界大戦後の一九一八年から第二次世界大戦終戦となる一九四五年まで日本の委任統治領^{注4}となり、日本と深いかわりを持つ。戦後もアメリカの信託統治領となる等、ミクロネシア連邦が独立する一九八六年に至るまで長い植民地の歴史を持つている。

物語は島で唯一のホテルを経営する父を手伝う主人公のティオ（十二歳）をめぐり、観光客としてそのホテルを訪れる客や、島民たちとの交流を通して起こる様々な出会いやドラマを、不思議な島の精霊信仰の世界観と共に映し出す。

十篇の連作短篇集となっている単行本『南の島のティオ』（楡出版、一九九二年）は「空いっぱいの大きな絵」（「空の絵」改題）が一九八三年一月号の「青春と読書」に掲載、のちに「飛ぶ教室」に掲載された八篇を含み、主人公の

モデルになった少年・ティオが書いた体を取った「あとがき、あるいはティオの挨拶」を加筆して単行本となった。同年、第四十一回小学館文学賞を受賞している。十篇のうち、「星が透けて見える大きな身体」（「飛ぶ教室」第三七号）は光村図書出版の中三の教科書「国語三」に平成五年から平成八年にかけて掲載されている。「星が透けて見える大きな身体」を持つ、巨大な天上世界の主と、島の幼い人気者・アコちゃんの命をめぐる対決は、挿絵の効果も相まって幻想的な映像となつて読者の心に残る。主人公ティオの勇敢な姿を描いたこの作品は、ティオと同年代の中学生の読者には共感を得やすい題材だろう。予言者・カマイ婆の存在も日本では見ることのできない共同体の信仰が人々の生活に根付いている社会形態を示している。指導書に、「人間の命の問題、自然と人間とのかかわり、人間の勇気などを主体的に考えさせ、生き方を考えさせる」とあるように、日本とはかけ離れた環境で生きる人々の生活を通して、人間の根源的で普遍的な生のテーマがこの作品の課題とされている。

一方で、池澤夏樹は同指導書に書き下ろしの自作解説として「南に理想境はあるか」という文章を書いている。ここで池澤が言及しているのは、「南の理想境」、つまりは〈楽園〉という定義である。ここで池澤は、この島を小説の舞台にする場合、「島やそこに住む人々をそのままモデルにするというのではなく、あるところまでは幻想の色合いを帯びた、一種の理想境の物語」となることを言及している。そこには近代ヨーロッパ人がしばしばミクロネシアの人々を「高貴な野蛮人」と呼んだように、文明人から見た理想郷という含みもあるだろう。その上で池澤は『南の島のティオ』についてこのように続けている。

この話を含む『南の島のティオ』でぼくが書いたのは、結局のところ、もう一つの喪失の物語、ぼくたちの社会

が百年前に失ったものを今失いつつある南の島の物語であつたようだ。

（池澤夏樹「南に理想境はあるか」^{（注6）}）

かつて、百年前の日本にあつて、今は失われた「もう一つの喪失の物語」への憧憬こそ、池澤夏樹がボナベ島を頻繁に訪れた当時、一九七〇年代の日本に感じていた「違和感」と重なるであろう。

二十代のぼくは日本で逼迫していた。どこにも出口がない感じだった。自分が生まれて住んでいる国、自分が言語や文化や生活によつて所属している国と折り合いが悪いのはずいぶん不幸なことだ。どうやっても自分をうまく生かす方法がないという思いで、日々を鬱々と暮らしていた。その時、とても幸運なきっかけでぼくはミクロネシアに行った。

（池澤夏樹『池澤夏樹の旅地図』^{（注7）}）

「この最初の海外体験を機に」池澤は最初の詩集『塩の道』（一九七八年）を出版し、やがて小説家の道へ進むべく『夏の朝の成層圏』（一九八四年）、『南の島のティオ』（一九九二年）、『マシアス・ギリの失脚』（一九九三年）と、ミクロネシアを舞台とした作品を次々に生み出していった。

では池澤はどのようにミクロネシアを扱ったのか。

ここで問題として考えたいのは異郷だ。樂園幻想を仮託された異郷。

ぼくはミクロネシアをどう使つただろう。・中略・後ろめたさの理由は、この子供向けの短篇連作の舞台として、ぼくがボナベ島を勝手に理想化したところにある。日本の子供たちを包む状況はひどいことになっているけれど、こ

の島にはまだ無垢のままの子供たちの暮らしがある、という楽園幻想の投射。（『池澤夏樹の旅地図』、傍線引用者）

「この子供向けの短篇連作」とは『南の島のティオ』のことであり、その舞台のポナペ島を理想化して、「無垢のままの子供たちの暮らし」という「楽園幻想の投射」が自分自身のミクロネシアへの眼差しの中にあったことを池澤は語っている。

若き日の池澤夏樹が日本に感じた「折り合いの悪」さを考える時、彼が終戦の年、一九四五年（昭和二十年）に生まれたことも重要な関わりがあるだろう。池澤が二十代を迎えるのは一九六五年、安保闘争の只中であり、七〇年安保における〈政治の季節〉の終焉、ベトナム戦争、そして日本が戦後の高度経済成長に浮足立っている時期を経験している。

当時の日本への抵抗の思いについて、池澤夏樹から、私は次のような回答を得た。^{（注8）}

一つは、群れることが好きではなかった池澤にとって安保闘争は積極的に参加するものではなかったものの、「ゲバ棒を振り回す連中より自分の方がずっと左だ」という認識をもって創作と対峙していたこと、二つ目に日本における「高度経済成長への反発」があったこと、三つ目は「南への憧憬」があったことである。

ミクロネシアを扱った『夏の朝の成層圏』、『南の島のティオ』、『マシアス・ギリの失脚』の問題意識の中には、異郷という〈楽園幻想の投射〉された〈日本人としての私〉という文脈があることは以前、拙稿で指摘した通りである。^{（注9）}

その「日本人としての私」という文脈の中には、このインタビューを聞く限り、戦後日本の資本主義志向に対する抵抗があったことが分かる。また、同拙稿では主人公・ティオの理想化された視点・言説を通して語られる〈楽園幻想〉

のメカニズムを探るには、批判的なポスト・コロニアル的言説によって、植民地後の小国を描いた『マシアス・ギリの失脚』を、同時期の作品として合わせて読む必要性を述べた。それは『南の島のティオ』の〈樂園幻想〉に隠された、もう一つの物語^⑨を解明することにつながるだろう。同時に二〇一〇年に刊行された文春文庫『南の島のティオ』において、池澤がミクロネシアへの再訪を機に、日本人が残した戦争の爪痕に真正面から向き合つて増補した一篇「海の向こうに帰った兵士たち」をあえて児童文学として『南の島のティオ』に加筆した意図を再考したい。

三

まず、『南の島のティオ』における従来の見方を確認しておきたい。

主人公・ティオという少年の人格について、三宮麻由子は次のように述べている^⑩。

すでに、歴史を、人の心をありのままに受け入れ、人を助ける方向に向かつて肅々と行動できる人格者なのだ。

確かに、物語に書かれているティオは、何かにつけて思慮深く大人びていて、十二歳の少年にしては出来すぎている。周りで起こる様々なことに対し冷静沈着で、感情的な批判もしない。『南の島のティオ』にはしばしば、外から持ち込まれる〈文明〉と島民が大切にする〈伝統〉との対比が書かれ、そこに葛藤が生まれて然るべきなのだが、ティオは「歴史」をありのままに見る〈目撃者〉ではあるが批判的言説は持たない。これは池澤が先に挙げた指導書の文章の中で、ティオを「報告者」^⑪であると位置づけているのと同義である。

例えば「十字路に埋めた宝物」（『南の島のティオ』）を見てみたい。そこに登場するバムという男性は、「トーラス」

環礁の出身で、そこに伝わる言い伝え、つまり「いい物を十字路に埋めておくと、そこを歩くみんなにいいことがある」という〈伝統的言説〉が息づいた生活を大切にしている。バムが舗装道路を壊し、掘り返して宝物を埋める行為に対し、ティオは犯人が誰であるのかを大人と一緒に探るものの、バムを咎めず、むしろその宝物である大きな巻貝の美しさをバムと一緒に愛でて、バムの持つ〈伝統〉を共有している。かといってティオは島に持ち込まれた〈文明〉である舗装道路を批判するわけでもない。熱帯雨林気候のため、道はぬかるみ、車を通したところで「セカンドギアでしか走れない」という島に、舗装道路を作るとは、外交上の政府関係者、観光客向け以外に必要なことであろう。物語では伏線として島に「道路工事を専門にやる日本の会社の人」が入り、舗装道路の工事が始まる光景が書かれているが、ティオはこの舗装工事に対し好奇心をもつて眺め、しなやかに〈文明〉を受け入れる少年として描かれているのだ。こうしたティオの描き方によつて、『南の島のティオ』は〈文明〉と〈伝統〉の平和的共存がなされている。^(注12)

一見するとティオの理想化された視点によつて書かれた『南の島のティオ』は〈樂園〉を、あるいは〈樂園幻想〉を描いた作品に見えるのだが、果たしてそうなのだろうか。

〈樂園〉に対する、あるいは〈樂園幻想〉に対する思索の萌芽は、池澤のデビュー作である詩集『塩の道』^(注13)にすでにみられ、同詩集の数篇の詩から作られた合唱曲・『ティオの夜の旅』（一九八三年、木下牧子作曲）からも見て取れる。この点について少しふれたい。

この合唱曲は、『南の島のティオ』に出てくる主人公・ティオの実際のモデルをモチーフにした詩を元に、全五曲からなる混声合唱曲で、現在も多くの中高生、大学生に親しまれている。『南の島のティオ』が一九九二年の刊行で、詩

集『塩の道』は一九七八年の刊行であるから、実在するモデルのティオとミクロネシアのイメージは、『南の島のティオ』の執筆以前から既にあつたということが分かる。もともと、合唱曲の表現は「詩」という性質上、『南の島のティオ』の言説が作る一貫した物語性はないし、その言葉は詩情を第一義にしてダイレクトで感覚的なイメージの連想によって作り出されているのだが。

合唱曲の全五曲は「Ⅰ祝福」「Ⅱ海神」「Ⅲ環礁」「Ⅳローラ・ビーチ」「Ⅴティオの夜の旅」とあり、この題名は詩集の中の詩の題と同じである。

例えば「Ⅰ祝福」では「光あれ 魚のうろこは予言を含み 潮はあふれる 魂の壺に 帆に描かれたしるしの外に 明日をひろげる神々の網」（一文字空きは改行）とあつて、島の人々に宿る精霊信仰と神々への敬虔な祈り、誇りがみなぎった詩となっている。しかし、「Ⅲ環礁」で詩句のイメージは一転する。「だまされて 風に鳴るビヤの缶に 閉じ込められた夏の朝の成層圏」は島の「平穩」が何者かに「だまされて」、やがて「砕ける大洋の砲声と白いしぶき」となつて破られ、「沖の環礁から離陸して空をゆく」ありさまを描写する。「沈船」の中で沈んでいく「ゆっくり揺れている幸福な死体」という表現からは美しい環礁を「砲声」が脅かし、船を沈め、死体を沈める不穏な動きが読み取れる。

池澤がここで使った「夏の朝の成層圏」の（成層圏^{成層圏}）という言葉のイメージが、のちの小説『夏の朝の成層圏』（一九八四年）のイメージと重なるのであれば、この言葉は静けさに守られて閉じられた空間、すなわちこの小説で主人公の「ぼく」が流れ着いた〈楽園〉というべき無人島を指すだろう。だが、この無人島は、アメリカ空軍がこの環礁を「核兵器の実験場」

『夏の朝の成層圏』、以下句点まで引用は同書）とした島で、「長距離ミサイルの標的がおかれ」、「島民を一時ほかへ移住させ」た場所だという。この小説『夏の朝の成層圏』の舞台である無人島が「トラック環礁」をモデルにしているあることを重ねて考えれば、ここで我々読者は、主人公「ぼく」が疑惑を抱いたのと同様に、戦後まもなくマーシャル諸島のビキニ環礁でアメリカが行った核実験を容易に想起することだろう。アメリカはマーシャル諸島での大気圏核実験が禁止されて後も南太平洋でミサイル実験を続けた。^(池田) こうした背景を重ねてみれば、『塩の道』の「環礁」の第四連はどう読めるだろうか。

落下する陽光が砂を熱く打ちすえ

溺れるおまえに魚の視線がまつわる

長い髪は濡れば潮 乾けば塩

（池澤夏樹『塩の道』、「環礁」一部抜粋）

最後の詩句、「濡れば潮 乾けば塩」という言葉も、核実験によって「溺れるおまえ」の「長い髪」を空しくなびかせる、汚染された海の「潮」と、もはや海ではない乾ききった「塩」を連想させ、ただならぬ島の運命を示しているかと読めるだろう。「まるで地上を離れて高い空の上で、成層圏で暮らすような」（『夏の朝の成層圏』）と例えられる「夏の朝の成層圏」の清々しい安全な空間のイメージは、一見〈樂園〉でありながら、外から持ち込まれた「核実験」、「ミサイル実験」といった「災い」を背負っていることを池澤は知っている。

では「Vティオの夜の旅」はどうか。第一連は「ティオは眠れない」で始まり、その原因は「湿った不安」とある。

「通信販売の型録にまたがり」「魔法」を使うが、うまく映像は見えない。「通信販売の型録」は広義で言えば、島には存在しない、外から持ち込まれた〈文明〉の比喩だろう。ティオは〈文明〉の先を〈魔法〉で見通すことはできないのである。しかし、第四連で、「電気麻酔」が起こると今度は明確な「像」を結び始める。少し引用したい。

その時

電気麻酔が像を結びはじめて

声はみなうまく風景にかわる

モンキーバナナは涙を落し

浅い海はセロファンの影

サメは大きな貝の中で白い腹を見せ

せせらぎはくつきりと際立つよう

麻酔は安定軌道に乗った

光りながら夜空をめぐる

丘の上の放送局の塔から

旅はたしかにはじまった

（池澤夏樹『塩の道』より「ティオの夜の旅」一部抜粋）

「モンキーバナナは涙を落し 浅い海はセロファンの影 サメは大きな貝の中で白い腹を見せ せせらぎはくつきり

と際立つよう」な光景とは、〈文明〉のもたらす平和的な未来ではない。「電気」と「麻醉」という人工的な麻痺を思わせる表現は、先ほどの「核実験」や「ミサイル実験」を思わせる風刺的表現である。モンキーバナナが流す「涙」、「セロファン」のように波立つ海、そして死を思わせる「白い腹を見せ」るサメは「電気麻酔」という〈文明〉によつて変わり果てた島の景色である。映像となつて見える島の未来は、やがて「テイオの夜の旅」となり、第五連では外部から犬を連れて現れた少女との「小さな戦い」によつて「紙飛行機」が飛ぶ。「彼は千年王国に君臨して 青い発電機をまわす」という描写から島の歴史、〈伝統〉に相反し、青い海の上でおそらく戦争のために持ち込まれた「発電機」（文明）を使用することは「核実験」や「ミサイル実験」が引き起こした争いの比喩と読めるだろう。外部から仕掛けられた罠から海を守るために「テイオは夜の間に 知恵を集めてまわる」、眠れぬ夜を過ごすのである。

ここでは詩集『塩の道』全体についての詳しい分析は避けるが、少なくともテイオをめぐる合唱曲の詩からは、池澤がテイオのモチーフと共に、傷ついた〈楽園〉・ミクロネシアの環礁を想起し、美しい自然の人為的破壊に対する怒りすら読みとれるのだ。

四

では『南の島のテイオ』とほぼ同時期に同じミクロネシアを舞台として書かれた『マシアス・ギリの失脚』（一九九三年）を合わせて読むとき、どのようなことが分かるだろうか。二つの作品が同じ題材をモチーフとしながらも、全く異なつた言説によつて書かれている部分を比較してみていきたい。

『マシアス・ギリの失脚』は人口七万という南洋の架空の小国・ナビダード民主共和国を舞台に、「植民地後もなお続く大国の圧力に翻弄される小国の運命を、〈伝統〉と〈文明〉の狭間で葛藤する大統領・マシアス・ギリの盛衰と共に描いた長編小説」^(注18)である。ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』の影響を強く受けたというこの作品には、歴史の時空を超え、〈想像力〉と〈神話〉を駆使したマジック・リアリズム^(注19)の手法が用いられ、この影響はすでに『南の島のテイオ』に起きる幻想的で不思議な出来事にも表れている。

日本通で、若い頃に日本の経営学を学び、商人から大統領にのしあがったマシアス・ギリは、積極的に日本の〈文明〉を取り入れ、その言説も〈近代的言説〉といえる。一方、彼の出身地である「メルチョール」の社会システムで育まれた〈伝統的言説〉が対照的に描かれ、両者はお互いを投射しながらギリの葛藤を通してポスト・コロニアル的視点が表象される。ギリの葛藤が、国家的戦略の上での小国対大国の〈伝統〉と〈文明〉の葛藤であると同時に、ギリの出自と育ちによって引き裂かれたアイデンティティーの葛藤でもあるという、〈大きな物語〉と〈小さな物語〉の二重写しになっているところも、ガルシア＝マルケスの壮大な物語を思わせる^(注20)。

大国の狡猾な援助と圧力の中で、植民地後も翻弄される小国の運命は（この場合の大国とは日本とアメリカということになっているが）資本主義経済の日本で池澤夏樹の見た、〈外から見た日本〉である。

まず〈文明化〉の表象として二作品の相違が分かる一例は、〈空港〉、〈基地〉の描写である。〈空港〉の描写は、二作品ともにボナペ島の同じ空港をイメージして書いたと思われるが、『南の島のテイオ』ではこのような描写がある。

飛行機は週に三度、月曜と水曜と日曜に島にやってくる。・中略・父とぼくがいつもより遅く空港に着いて、車

を置き、パンダナスの葉で屋根を葺いたターミナルに入ると、もうかすかな爆音がオレンジ色に染まった西の空から響いてきた。

（傍線、引用者、『南の島のティオ』、「絵はがき屋さん」）

空港に降り立った観光客の日本人女性は、この後、夕日で照らされた「克蘭ボクの山」の美しさに「いいところね、ここは。」と感動を漏らす場面がこの後に続く。

一方で、『マシアス・ギリの失脚』では「八年前に日本とアメリカ合衆国の援助で造られ」た〈空港〉により必然的に「親しい仲」を強いられた状況下で次のような描写がある。

いったいこの国としては彼ら貪欲な二つの大勢力に対して、ジャングルを削って走りまわる三菱キャタピラー社の巨大なブルが造った滑走路・誘導路と、周囲の椰子の林を圧倒して聳える醜怪な似非現地様式のターミナルに対して、何をもつて支払いをすればよいのか、それはいつになっても不分明だった。・中略・本来ならばこの島に育った木々の幹で作られるはずの合掌造りの屋根の形を鉄筋コンクリートが不器用に模している。

（傍線、引用者、『マシアス・ギリの失脚』）

『南の島のティオ』における〈空港〉の描写が、島の景観を壊さず、「パンダナスの葉」を葺いた屋根で、土地の自然を生かした作りになっているのに対し、『マシアス・ギリの失脚』では〈空港〉をめぐる援助国、日本とアメリカの思惑を暴き、土地の自然を無視した「鉄筋コンクリート」の「醜怪な似非現地様式のターミナル」と表現されているのは対照的である。資金援助された小国の〈空港〉には、小国対大国の資本主義国家の縮図が、ギリのポスト・コロ

ニアルの言説で示されているのである。

〈基地〉についての描写はどうだろうか。

『南の島のティオ』では「絵はがき屋さん」の中にこのような記述がある。

彼は楽しそうにさまざまな土地のことを話してくれた。・中略・また別のある島には飛行場と大きな燃料タンクがあるだけで人はだれも住んでいない。時々、飛びすぎて燃料の足りなくなった飛行機が降りてきて、燃料を補給し、またそこから飛び立ってゆく。

（「絵はがき屋さん」、『南の島のティオ』）

「飛行場と燃料タンクがあるだけで人はだれも住んでいない」島の話は、不思議な絵はがきを売りに来た旅人の、面白いエピソードとしてユーモアをもって語られる。実際にはこれは後述するように、ポンペイ州のレンゲル島に日本が残した戦争遺跡と思われる。（第五章を参照）「海辺の空港に降りる飛行機」が「庭先に飾った植木鉢を蹴倒すように着陸」する様も、『南の島のティオ』の場合、旅人の「楽しそう」なエピソードの範疇を出ない。不思議な魔力を持ち、絵はがきで人を呼び寄せる旅人は、島の社会システムの中で育まれた、いわば〈伝統的言説〉の住人で、歴史への〈批判的言説〉を持ち合わせていない人間として意識的に池澤が書き分けているからである。島を再訪した人が「白いランの花」に感じる「生まれる以前」の記憶、この土地の持つ〈円環する共同体の記憶〉こそが『南の島のティオ』に終始一貫して通ずる幸福感であり、楽園幻想といえる。『マシアス・ギリの失脚』の〈批判的な言説〉とは異なる表現方法を取っているのである。

『マシアス・ギリの失脚』では、〈基地〉は、経済大国・日本が仕掛けてくる軍事戦略として語られる。「ブルン環礁に日本政府の金で日本のための石油備蓄基地を作る」代わりに「妥当な額の海面使用料」を支払って軍事基地にしようという日本側の提案なのだ。

「なぜ我が国が、美しい礁湖の中に醜いタンカーを並べ、汚染の危険を背負い込んでまで、日本の安全保障のためこの基地を作らなければならないのか。」
(『マシアス・ギリの失脚』)

独立後も軍事目的の石油備蓄基地を持たなければ、国の安全は保障されない小国の運命を嘆くギリの言葉はそのまますト・コロニアル的言説で、狡猾な経済大国・日本の姿も、また大国の安全保障に怯える小国の姿も、池澤のみた〈外から見た日本〉を反映させた姿である。戦後七十年以上たった今もアメリカの安全保障の傘下に抱える沖縄基地問題も然りであろう。そしてこの挿話もまた、パラオの史実を元にしていると思われる。^(注21)

ほかにも『南の島のティオ』にある同じエピソードが『マシアス・ギリの失脚』においては、ギリの〈近代的な言説〉による、資本主義批判となつて表現されている場面は多い。例えば〈食文化〉に関する記述において、醤油とタバスコで食すマグロの食し方は、両作品に見られ、日本の委任統治領時代の名残を残している。また自給自足の島に貨幣を持ち込み、貨幣でしか買えない日本の米の味を教えたことが最大の日本人の罪だと説く『マシアス・ギリの失脚』では決して『南の島のティオ』には書かれなかった文明の弊害、〈貨幣経済〉の弊害を読み取れる。

登場人物のカタカナ表記の日本人名は『南の島のティオ』の中でもさりげなく書き込まれているが、戦前日本の日本語教育による同化政策の痕跡といえる。^(注22)

このような戦争による文化・言語・思想などの余儀なき変容は、池澤が絶えず言及するように、「先の土地の民にとっては侵入者による搾取^(注23)」であり、「そこで稼げるということはすなわち何かを持ち出すということではないか^(注24)」という、宗主国と植民地の搾取という資本主義社会の縮図を示している。もはや日本人である自分がミクロネシアを訪ねる時、手つかずの自然に触れているという思いは楽園幻想にすぎない。

ところで『南の島のティオ』の「地球に引っぱられた男」にはヘルナンデスという男が出てくる。「トーラス環礁の一番大きな島でスーパーマーケットを経営」し、「とても威張って」いて、「まるでこの諸島全体の大統領かなにかのよう」だとあるこの男は、〈近代化〉の象徴であるマシアス・ギリの原型である。島の巫女的存在・「カマイ婆」に、飛行機が墜落することを予言されたこの男の物語は終始ユニークに書かれる。「あの男は落ちる。あんまり悪いことをした。神々は怒っていらつしゃる」とカマイ婆に予言されたこのヘルナンデスという男は、結局、船上の甲板で足を踏み外し転落死するのだが、島の巫女的存在であるカマイ婆の予言によって、神々の〈共同体の原理〉に裁かれた者として位置づけられている。

一方、『マシアス・ギリの失脚』では、〈共同体の意思〉と〈近代化〉、あるいは〈国家〉と〈個〉の対立構造はパラオの早世した王子・リー・ポーの亡霊との対話で巧みに示される。

『マシアス・ギリの失脚』に登場する亡霊「リー・ポー」とは一七八三年、パラオで難破したイギリス船を救ったパラオの酋長の第二王子「リー・ブルー」のことで、イギリス留学を果たすも天然痘により二十歳の若さで急逝した^(注25)。彼のイメージは、その死後もたびたび文学や詩となつて取り上げられ、パラオのポスト・コロニアルの象徴的な存在と

なっている。^{注26}『マシアス・ギリの失脚』の中でも大国の〈文明〉と小国の〈伝統〉の葛藤という課題を背負った人物と

して、大統領マシアス・ギリと共通のポスト・コロニアル的な視点を持つ者として対話し、行き過ぎた〈近代化〉と〈個人主義〉ゆえに過ちを犯したギリの失脚に次のように語る。

「一つの意思。どうか。この世界では個人はきみが思っているほど個人ではないよ。ここは日本ではないから。生きた者、死んだ者、たくさんの人間の考えや欲望や思いが重なりあつて、時には一つの意思のようにふるまうこともある」
（『マシアス・ギリの失脚』）

「大国の隙間を縫って生きてゆく他ない」国の運命を背負つて、不正な資金を集め、政敵すらも抹殺しようとしたギリの強引な〈近代化〉、〈個人主義〉は、故郷メルチョールの〈共同体の意思〉によつて長老会議^{（注27）}にかけられ否定された。だが彼の失脚でナビダード民主共和国は、狡猾な日本に従い、「石油備蓄基地」を環礁に浮かべる国の一大事、「自己植民地化」（『マシアス・ギリの失脚』）からは辛くも免れたのである。個人の死であるはずのギリの死が、故郷・メルチョールの上空から飛行機で散り、故郷に回収されていく姿は、同時に今は失われてしまった日本の〈共同体の原理〉という精神的支柱の不在を、現代に生きる我々日本人に突き付けているのかもしれない。その危うさは、そのまま、現代の対アメリカにおける日本の姿ともいえるだろう。須藤直人が指摘のように、「外から見た日本、周縁からの日本批判を近代以前の民話の世界や共同体の原理と、語りや近代的個の原理の対立構造の中で表現した」^{（注28）}のが『マシアス・ギリの失脚』であろう。

今一度、歴史の史実に戻して考えるならば、戦後におけるパラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島は「アメリ

力との自由連合協定を締結し」^(注29)、「この協定によって、アメリカはミクロネシア諸国に膨大な援助金を提供する代りに、これらの国々の領土・領空・領海における独占的な軍事権を手に入れた」^(注30)。ミクロネシアに戦後も援助金を出している国こそ、アメリカに続く援助国は、日本である。もはや「空港」におけるアメリカ・日本の資金援助の共犯思想は史実に基づくエピソードであろう。また、ナビダード民主共和国のモデルであるパラオは実際、一九九四年に独立するものの、その過程の中でアメリカによる「巨大石油コンビナート建設計画も」^(注31)「二〇年以上にわたって抵抗し続け」^(注32)中止に追い込んだ、という歴史を持っている。近代化に抗う酋長による土地制度というパラオ独自の「伝統」を守り続けた戦いの痕を見ることができる。

『マシアス・ギリの失脚』にある〈小国〉対〈アメリカ・日本〉の構図は、植民地から独立した後も違う形で続くポスト・コロニアルの現状を史実に基づきながら批判的な言説による語りで一貫している。それは児童文学作品である『南の島のティオ』のティオが持つ理想的視点からは語りえなかった〈文明〉、〈近代化〉と〈伝統〉の葛藤であり、同時に〈戦争〉の歴史でもある。『南の島のティオ』のそれぞれ各篇の詳細については前掲の拙稿と重なるのでここでは控えたいが、二つの作品を見ると、池澤夏樹の意識的な書き分けがなされていることが分かる。そして『南の島のティオ』では、あくまでも島に起こるマジック的なエピソードを交えながら、美しい自然の中のびやかに生きていくティオを中心に、島の消えゆく〈共同体の原理〉、〈伝統〉を言葉で書き残すことに重きが置かれているのである。

ここまで、『南の島のティオ』に描かれた〈樂園幻想〉に隠されたもう一つの物語の存在を、様々な視点から見てきたが、ここで初版の『南の島のティオ』の単行本から二十年近くの歳月を経て、二〇一〇年に文春文庫『南の島のティオ』に新たに加筆された「海の向こうに帰った兵士たち」について述べたいと思う。この一篇は、二〇一〇年以降の文庫文庫のみに収録されており、二〇一二年に出版された『青い鳥文庫』^(注5)には収録されていない。「海の向こうに帰った兵士たち」はそれまでの『南の島のティオ』の各篇ではほとんど扱ってこなかった、島に残る戦争の爪痕に真つ向から向き合った作品となっている。

この作品の初出は『TIO'S ISLAND』（小学館、二〇一〇年七月）という写真集で、写真を懐かしく思った池澤が二〇〇八年にミクロネシアの再訪し、成人した元氣なティオと再会を果たしてこの物語を書くかと思いついたという。^(注6)ティオの成長を通じて、日本とポナペ島の戦争の歴史と正面から向き合い、語ることが可能な時期となったことを池澤も感じたのだろう。そしてこの作品の随所に見える〈遺骨〉や〈戦車〉といった視覚的な題材によって、わかりやすく、戦争のメッセージを伝えようとする意図が働いたと推測される。

物語はポナペ島で戦死した日本兵の夫の遺骨を探しに、初音おばあさんとその家族が、ティオのホテルにやってくるから始まる。アメリカ軍との戦闘で「海岸から攻め立てられてみんな山の中に逃げて、そこで食料も弾薬も尽きて亡くなった」と夫の最期を想像して、初音おばあさんとティオの一行は、遺骨を求めサマン村のジャングルを歩き回る。

大木の根元のところ、半端に伸びた下草の中に黒っぽい布の塊のようなものがあつてその脇に錆びた鉄の棒が転がっている。よく見ると朽ちた銃だった。

布の塊の中にわずかに白いものが見えた。骨だ。

（海の向こうに帰った兵士たち）

異郷のジャングルの中で今も置き去りにされたままの日本兵の遺骨に初音おばあさんは思わず「こんなところで、何十年も独りで・・・」と声を漏らし、誰のものかわからないその遺骨を日本に「連れて帰りましょう」と提案する。ここでもティオはこの日本人家族に同行し、〈遺骨〉の目撃者として、物語の証人となり、初音おばあさんの心に寄り添っていく。

そして『南の島のティオ』において戦争は、初めて次のような文章で語られている。

この島は第二次世界大戦が終わるまでは日本の領土だった。

日本の兵士がたくさんいて、そこにアメリカ軍が攻めてきて、たくさん日本兵が死んだ。

島の人も死んだ。その頃の話を書いた年寄りは覚えていて、よく話してくれる。辛い時期だったとみんなが言う。

（傍線、引用者、「海に向こうに帰った兵士たち」）

日本の委任統治領時代のボナペ島について、「島の年寄りは覚えていて、よく話してくれ」るものの、ここでは「辛い時期だった」という記述のみで具体的な年寄りに聞いた話は書かれていない。

実際にはボナペ島の戦渦はどのようなものだったのか。ここで当時のボナペ島の戦況を伝える資料として、高野誠二・栗原剛・永山茂樹・奥山三喜・千葉雅史「ミクロネシア連邦ポンペイ州における戦争遺跡の現況と教育・観光面にお

ける活用策の検討^(注36)」という論文から引用したい。この論文は東海大学が二〇一八年に実施した第49回海外研修航海において同論文の著者が現地調査を行ったものをもとに書かれた論文で、写真①②の二枚のもこの論文の著者から使用許可を得た。

太平洋戦争末期の一九四四年二月ごろからアメリカ軍の攻勢が激しくなり、日本海軍の基地が置かれたチューク諸島や、ポンペイ島のコロニアの街と飛行艇基地が置かれたポンペイ島沖のレンゲル (Lengel) 島などは五月ごろまでに激しい空襲や艦砲攻撃を受けた。しかしポンペイ島は最後までアメリカ軍の上陸侵攻を受けることなく、終戦を迎えた。

この資料によると、ボナベ島（現在のポンペイ島）はコロニア市街地と「飛行艇基地」のあったレンゲル島の空撃・艦砲射撃を除いては地上戦を免れたようである。現地に兵士として赴き帰還した日本人の体験談では、アメリカ兵がボナベ島にいる日本兵の数を誤算し、万単位で間違えたため、攻撃されなかったという説もある^(注37)。

『南の島のテイオ』で初音おばあさんが想像したアメリカ兵との地上戦や山中に逃げ込んだ話も若干、誇張があるかもしれないが、実際にこの論文を見る限りでの戦争遺跡の存在は、物語から想像する以上のものである。

例えば写真①にあるのは、ボナベ島に日本兵が放置した「九十五式軽戦車」の中の一台中、ほかにもこの調査の当時、二〇一八年の時点で海岸線に十台あったという。管見では、イギリス人が所有のこのうちの一台中か日本に帰そうと、日本人がクラウドファンディングと私費で里帰りさせるプロジェクトが立ち上げられ、実現したのがつい二〇一九年のことである。

写真②にあるのはレンゲル島に残る巨大石油タンクで、今もこの島には「飛行艇基地」他、多くの戦争遺跡が残る。「絵はがき屋さん」に出てきた「燃料タンクがあるだけの島」は日本人がレンゲル島に戦時中に残したこの戦争遺跡を示しており、単なる旅人の語ったエピソードではないことが分かる。

実際に今も残るボナペ島、レンゲル島の戦争の爪痕は島の至るところに二十箇所以上あり、^(注38)〈遺骨〉、〈戦車〉、その他の戦争遺跡にしても、両国間で解決しきれない問題を島に残している。島に混在する戦争の爪痕が、池澤自身もちろんのこと、島民ティオの目にも入らないわけではない、ボナペ島の島民は美しい大地にそれらを計らずも抱いて生きている事が歴史の語る真実である。そう考えれば、今までほとんど『南の島のティオ』に書くことのなかった戦争のテーマを、「海の向こうに帰った兵士たち」として加筆した意図はさらに明確だろう。

ティオ達に〈遺骨〉を発見させたことも、児童文学として、池澤夏樹が戦争を伝える際に、年寄りから「聞いた話」ではなく、ティオという〈目撃者〉の眼を通して、「見たもの」を直接的に伝えたかったのではないかと考えられる。そのためには〈遺骨〉や〈戦車〉、〈日本兵〉という目に見える映像として戦争の爪痕を「見せる」ことは必要だった。中でも、両国の戦後を考える上で重要な鍵となるのは、〈戦車〉である。マクブライドというオーストラリア人の彼は、「日本軍が放置していった戦車」を修理してお披露目するというのだが、その戦争のメッセージはユーモアのある『南の島のティオ』の世界観はそのままだに、ティオを〈目撃者〉として配置しつつ、終わらない戦後の物語の終焉に向けて動き出す。

昔の日本軍はなぜだかこの島に分不相応の戦車部隊を配置したらしくて・中略・軽戦車が九台も来ていたという。

しかし、島の大半はジャングルだから走れる場所は少なかった。アメリカ軍が迫った時、戦車の大半は山に逃げ込もうとしてジャングルの中で動きが取れなくなった。

（海の向こうに帰った兵士たち）

土地勘のない日本兵の持ってきた「この島に分不相応な戦車部隊」の九台の「軽戦車」とは、写真①で見た95式軽戦車で、島の当時の雰囲気を与えている。しかしジャングルの多い島にはあまりにも場違いで、しかも「分不相応」だとするのは、もともとこの軽戦車が「搜索用の軽戦車」^(注39)だったからだろう。アメリカ兵の戦車と比べ「小型トラックくらい」とか、「おもちゃみたい」というティオたちの表現からもわかる。マクブライドはお披露目の修理した戦車をこのように紹介する。

この戦車は歴史の証人です。日本軍はこんなもので勇敢に戦って情けなく負けた。二度と戦争を起こさないためにも、この戦車が動くところを見ていたきたい。

（海の向こうに帰った兵士たち）

可視化された日本兵の戦車にまつわる言説は、これまでの『南の島のティオ』の言説にはなかった〈批判的な言説〉といえる。誰の眼にもアメリカの戦車と比較にならない実物大の〈戦車〉の姿を、そして島民の大地に残した負の歴史を語っている。ここでもティオは会話の一部始終を聞き、戦車の行方を見届ける〈目撃者〉の役割を果たしている。無人の戦車がやがて海にむかつて動きだし、旧日本兵の幻をそこにいるすべての人が見るのだ。

その戦車に引率されるように、百人を超える兵士たちが水の中に、沖に、海の向こうに行進していく。・中略・最後の一人が・中略・片手を上げて挨拶のような仕種をした。「あなた！」と初音おばさんがとても小さな声でつぶ

やいた。砂浜には戦車のキャタピラーの跡と兵士たちの足跡がくつきりと残った。（海の方こうに帰った兵士たち）ポナペ島にいた日本兵は、史実によると、実際には敗戦後に米軍が用意した「米軍輸送（USC）リバーター艦」という立派な船で肩身の狭い思いの中、日本へ帰還したという。^{（注40）}

物語の終結がこのような幻想的な光景で、両国間の戦争の区切りを作ったことは、出来すぎた感はあるものの、これも『南の島のティオ』全体に流れる共同体信仰であり、先に述べたガルシア・マルケスの〈マジック・リアリズム〉の影響も大きいだろう。島にはあらゆる不思議が起こりうる精霊信仰と共同体原理が存在し、それを受け入れて人々は生きている。百年前の日本にあつて今はない物なのである。しかし、ここで遺骨も見つからない日本兵を、日本の戦車で帰したい、という日本人の誇りと意地が池澤に働いたことは間違いない。そしてこの帰還には現代の日本人が持たない（あるいは理解できない）同じ志で死んでいった〈共同体の魂〉をもつて帰還させたい、という池澤の意図が働いたのではなかったか。

初音おばあさんが夫の遺骨と二人で帰ることを望んでいたにも関わらず、そうは書かなかつたという意図もここにあるだろう。後日、誰のものは分らない〈遺骨〉と共に初音おばあさんが帰国しようとする、その〈遺骨〉は消えているという二重のマジックによつて、日本兵の亡霊たちは〈戦車〉で帰つたのである。

この光景は、両国の終わらない戦後の一つの区切りを書き、それを日本人と現地の人々が、もちろんティオも歴史の〈目撃者〉としてそれぞれが胸に刻む機会を作つた。

物語としての戦争の結末は、それまでの『南の島のティオ』の世界観の範疇から出るものではない。だが視覚的に

わかりやすく、そして史実が語る〈事実〉と、それを受け止める両国の人々の〈心の真実〉の間を想像力で埋めることは、決して児童文学が伝える戦争のメッセージとして相反するものではない。むしろ、見たままの真実をそのまま書くことよりも、複雑な両国間の心の叫びに寄り添った池澤夏樹にしか書けない戦争のメッセージだろう。

終わらない戦後に付した一つの結末は、池澤夏樹が『南の島のティオ』の〈もう一つの物語〉にとじ込めた、日本人としての鎮魂と次世代の子どもたちへの平和の祈りといえよう。

注

- 注1 池澤夏樹「ヒストリー陸軍被服支廠」『旅のネコと神社のクスノキ』、スイッチ・パブリッシング、二〇二二年八月）の解説によると、陸軍被服支廠（りくぐんひふくししょう）は広島市南区出汐にある鉄筋コンクリートの三階建てで外壁がレンガでできた陸軍の軍服・軍靴などを作る工場と保管倉庫で、「構内には鉄道の引き込み線があつて、物資はこれですぐ南の宇品（うじな）港に運ばれ、船に積まれて戦地に送られた」とある。日清戦争の頃より兵站（へいたん）の拠点となった所以とある。

- 注2 池澤夏樹『カデナ』（新潮社、二〇〇九年一〇月）

- 注3 「文藝」（二〇一一年春号）の年譜によると、池澤夏樹は最初にボナベ島に旅行したのは一九七二年とあり、以後一九八一年〜一九八五年まで毎年訪れている。

- 注4 第一次世界大戦後、日本の委任統治領となったマリアナ、パラオ、マーシャル諸島は南洋群島といわれ、南洋庁

が設置されてインフラ整備や産業の振興・経済の発展を促した。第二次世界大戦下では、日本は南進政策を推進し、『海の生命線』としての南洋群島の国防的意義』（矢内原忠雄『南洋群島の研究』、岩波書店、一九三五年九月）を高めた。日本の委任統治領時代には、およそ八万人の日本人がポナペ島に居住していたという。

注5 『国語 学習指導書3上』（光村図書出版、一九九三年二月）

注6 池澤夏樹「南に理想境はあるか」（出典は注5に同じ）

注7 池澤夏樹『池澤夏樹の旅地図』（世界文化社、二〇〇七年三月）

注8 二〇二一年五月二十七日、インタビューにてご回答いただいた。（聞き手、中野裕子）

注9 中野裕子「池澤夏樹『南の島のティオ』論 隠されたポスト・コロニアル言説」（『信州豊南短期大学紀要』第35号、二〇一八年三月）

注10 三宮麻由子「文字の向こうに 第八回『南の島ティオ』Ⅱ過去と未来の狭間で」（『文学界』、二〇〇七年八月）

注11 池澤夏樹、注6に同じ。

注12 北原泰邦・中野裕子『児童文学の愉しみ 20の物語 明治から平成へ』（翰林書房、二〇一四年、八月）の「十字路に埋めた宝物」の解説（中野裕子）を参照されたい。

注13 池澤夏樹『塩の道』（書肆山田、一九七八年三月）

注14 「成層圏」は国土交通省北海道開発局室蘭開発部のホームページによると、「私たちが生活している地上から10kmまでの対流圏とよばれる空気の間」より上の「地表から10km〜50kmは成層圏とよばれる空気の間」で、対流がな

く、「雲もなくいつも晴れて」いるとある。また大気中のオゾンの約90%は成層圏にあり、(気象庁ホームページ)「成層圏オゾン」は、太陽からの有害な紫外線を吸収し、地上の生態系を保護」しているとある。

注15

前掲『池澤夏樹の旅地図』によると、『夏の朝の成層圏』に登場するアメリカ人俳優・キューナードの別荘があった「ユウ島」は「クワジェリンからモーターボートで六く七時間の距離」にあり、「形のモデルはトラック環礁です」とある。

注16

ロニー・アレキサンダー『大きな夢と小さな島々』(国際書院、一九九二年九月)によると、「アメリカは一九四六年く五八年の間にマーシャル諸島のビキニ環礁で二三回エニウエタック環礁で四三回、合計六六回の核実験を行った」とある。中でも一九五四年三月の水爆は「広島に投下された原爆の千倍もある破壊力」だったといい、日本のマグロ船「第五福竜丸」の乗組員も被爆して一人が亡くなった。実験中にクワジェリンに避難した人の中にも白血病、甲状腺がん、流産、奇形など、被害は四〇年を経ても止まず、二〇〇一年の時点で保障については係争中とある。同書によれば、一九六三年核実験禁止条約により、大気圏核実験が禁止されることとなったが、「成層圏」のオゾン層は核実験で破壊されることが近年、分かってきている。『夏の朝の成層圏』にあるように、核実験中に避難の別荘を捨てて島を出たアメリカ人の挿話はこの事実から遠くないと推測される。

注17

池澤夏樹の詩集『塩の道』では、冒頭に戦争を想起させる「軍港」という詩がある。また、「半島」では邪神の住む陸から、海へと旅立つ船を待つ「おれ」が大祓の神、速開津姫(はやあきつひめ)に人間の持つ罪と穢れを飲み干してもらおうと願う詩句がみえる。

注18 中野裕子「池澤夏樹」(『改訂デジタル版 日本近代文学大事典』、講談社、日本近代文学会、二〇二二年五月)、『マシアス・ギリの失脚』の項目。

注19 池澤夏樹『現代世界の十大小説』(『文芸春秋』出版、二〇一四年十二月)の説明によれば、『百年の孤独』を始めとしてラテン・アメリカ文学に見られる手法で、「現実と幻想の共存」する作品を「マジック・リアリズム」(魔術的リアリズム)と呼ぶとある。

注20 ガルシア・マルケスは国の「政治、社会、文学、あらゆる真実がある」(『疎外と反逆 ガルシア・マルケスとバルガス・ジョサの対話』、寺尾隆吉訳、二〇一四年三月、水声社)という、国の歴史・経済・大統領の一代記などすべてを包括した「全体小説」という言葉でラテン・アメリカ文学におけるスタイルを作り、『マシアス・ギリの失脚』もこの影響を受けている。詳細は稿を改めたい。

注21 アメリカが計画していたパラオの巨大石油コンビナートについては第四章、注30を参照されたい。

注22 『南の島のテイオ』の本文では、島民に日本人のカタカナ表記の名前がついている例として「サブロー」や「ヘイハチロー」などの名前が出てくる。特に日露戦争の海軍大将・東郷平八郎を思わせる「ヘイハチロー」の命名は戦前のボナベ島における日本の同化政策の影響が想像できる。また『マシアス・ギリの失脚』にはその様子が、より具体的に「内南洋ではすべての人間が二級日本人であると規定され、日本語が教えられ、臣民として神社への参拝を義務づけられ、最後には兵士として遠い戦場へ赴くことを強制された」とある。日本の国体・思想を植え付けることが目的の臣民教育や日本語教育が行われていたことは戦前から南洋庁が作った教科書「南洋群島

国語読本」(大正六年、昭和十二年、第四次改訂まで全八巻が現在、錦糸町の教科書研究センターに保管)を見ても明らかである。その内容は日本の歴史上の人物の紹介、神話、昔話、地理、風習、農業など多岐に及び、日本への理解を深めるための教本となっている。

注 23 注7に同じ。

注 24 注7に同じ。

注 25 『太平洋諸島百科事典』(原書房、一九八九年六月)を参照。

注 26 須藤直人「『高貴な未開人』の比較文学―太平洋のポストコロニアル表象におけるパラオの王子リー・ブルー」(『立命館大学』、二〇一四年二月)

注 27 例えば「長老会議」の参考にされたと思われるパラオは、一九八〇年に草案されたパラオ憲法第八条第六項で、州の全国首長協議会の権限を「伝統的な法、慣習、並びにそれらとこの憲法およびパラオの法律との関係に関して、大統領に助言する」(須藤建一監修『パラオ共和国―過去と現在そして21世紀へ―』、おりじん書房、二〇〇三年四月)と定義している。

注 28 注26に同じ。

注 29 松島泰輔『ミクロネシア―小さな島々の自立への挑戦』(早稲田大学出版部、二〇〇七年一月)

注 30 注29に同じ。

注 31 注29に同じ。同書によれば、パラオにはアメリカによって一九七四年に立案された「スーパーポート建設計画」(巨

大な埋め立てによる石油備蓄基地）があつたが、オイル流出の懸念、珊瑚礁の破壊、伝統的な土地の利用権の侵害などを理由に酋長、島民の反対があり実現しなかった。「日本への安定的な石油供給体制」という「日本の国益」もこの計画の背景にはあつたという。

注 32 注 29 に同じ。

注 33 注 9 に同じ。

注 34 『青い鳥文庫』の『南の島のティオ』（講談社、二〇一二年四月）の読者層は「小学中級から」となっており、文庫本よりも年齢層は低く、「海の向こうに帰った兵士たち」は収録されていない。池澤夏樹のあとがきにも「今の日本にはない種類の価値あるものに会えるといい」（池澤夏樹「青い鳥文庫の読者に向けてのあとがき」、講談社青い鳥文庫『南の島のティオ』、二〇一二年五月）とあるように「幸福なティオの島」を描くことに重きを置いていることがわかる。

注 35 池澤夏樹「ティオのこと」（『TIO'S ISLAND』小学館、二〇一〇年七月、写真・竹沢うるま、物語・池澤夏樹）

注 36 高野誠二・栗原剛・永山茂樹・奥山三喜・千葉雅史「ミクロネシア連邦ポンペイ州における戦争遺跡の現況と教育・観光面における活用策の検討」（『東海大学紀要 国際教育センター』、第九号、二〇一九年）

注 37 秋田武彦『南海の不沈艦 ポナペ島戦記』（恒文社、一九八一年二月）

注 38 注 36 に同じ。

注 39 島田豊作ほか『戦車と戦車戦』（光人社、二〇一二年三月）によると、日本軍が南洋戦で使用した軽戦車は「小



写真① ポンペイ島 九十五式軽戦車



写真② レンゲル島南部の巨大石油タンク

注
40

注
37に同じ。

型の九十五式軽戦車」で「搜索用の軽戦車」であり、装甲も低かったとある。一方のアメリカのM3戦車は、正面から95式軽戦車を撃つと貫通する威力があったという。日本はこの95式軽戦車でビルマ、ペリリュー島では完敗している。